

# 編集委員 インタビュー

## 兵庫県参与(花と緑のまちづくり推進担当) 石原 憲一郎さん(74)に聞く

### 焼失した首里城 復元進んでいますか



明石市内(撮影・吉田敏史)

根っからの神戸っ子。沖縄の縁はどのようにはじめたのですか。

「不思議ですよ。よく聞かれます。旧建設省で大阪花の万博の準備を担当していた頃、沖縄総合事務局へ転勤となりました。それまでは各地で都市計画や土地区画整理、公園緑化などを手掛けてきたので、沖縄への異動は驚きました」

「沖縄には出張で訪れただけでは分からない魅力がありましたね。美しい海や独特の文化、強い地域アイデンティティ、ゆっくり流れる時間…。何より開放的な人々と泡盛を酌み交わし、語り合のが楽しかった。在任期間はずっと年々でしたが、すっかりこの国になりました」

首里城正殿復元事業は、1992年の沖縄本土復帰20周年の記念事業でした。その復元計画の指揮に当たったのですか。

「歴史的に首里城が何度焼失したか、存じていますか。1429年に琉球王国が建国してから、私が沖

真つ青な空に映える、あでやかな赤。沖縄で初めて首里城を見たときの記憶は今も鮮明だ。その美しさに圧倒され、撮影するのにも忘れて見られたことを覚えている。兵庫県参与(花と緑のまちづくり推進担当)の石原憲一郎さん(74)は、1992年の首里城正殿復元事業に携わった一人。その後、沖縄の縁は続き、訪問は100回を超えたといい、現地では今、2019年秋の火災で焼失した正殿などの再建作業が進む。石原さん、またあの光景に出合えますよね。「あの頃と同じように、現場の関係者が頑張っています」。日焼けした顔をほころばせた。(末永陽子)

縄に赴任する87年までの間に4度焼失しています。4度目は太平洋戦争での米軍による爆撃でした。首里城の中でも、特に『正殿』は政治や行政の中心の場として象徴的な建物です。できるだけ忠実に復元するため、構造や建材、瓦、色彩などの裏付け資料が必要でした。着任して復元の基本設計を任せられたが、ほとんど資料がなかった。そこで、幅広い分野の意見を聞くために専門家を集め、古里からの聞き取り、さらに中国で北京の紫禁城を現地調査しました。基本設計を検討しているときに偶然、貴重な資料が見つかった幸運もあって何とか完成しました。「巨大なプロジェクトで大変でしたが、充実していましたね。深夜まで会議室に詰め、意見を話し合う日々でした。休日には本島や離島のウツキ(御嶽)やメソク(城など)を見て回りました。沖縄の歴史、文化、宗教をより深く理解する必要があると思いました。神秘的な体験もしましたよ。その話は、また次の機会にしましょうか」

2019年10月、正殿を含む3棟が焼損する火災が発生しました。

「早朝、妻の悲鳴のような声で起

### 5年後完成の大プロジェクト / 再建過程伝える工夫も



再建作業が進む首里城の正殿跡(中央) =2020年6月、那覇市

きました。『首里城が燃えている』、と。二エース映像にがくせんとしました。体の震えが止まらず、気が付けば涙が頬を伝っていました。約1カ月後に現場を訪問して、目に映る光景に絶句しました」

現地では22年中の着工、26年までの完成に向け、復興が進められています。

「そうですね。現場の関係者から焼失後の対応や再建に向けた委員会への検討が詳しい報告が届きます。関係者間ではできるだけ情報を公開し、県民とともに再建の過程を共有する意識が強いようです。復元の様子や進捗を展示室も設置されました。新しい首里城に出合えるのを心待ちにしていきます」

沖縄と関わる中で米軍基地や貧困などの問題について、考え方が変化はありましたか。

「私は名護市に住んでいましたが、米軍機による飛行訓練の騒音はさすがに慣れないままです。屋外での会話はもういっしょ、屋内でもお互いの声が聞こえないうちもありません。沖縄の経済はよく『OK』と言われています。基地、観光、公共事業の頭文字のKです。本土の間もそういった経済の現状や課題を、より深く知る必要があると感じています」

「沖縄は文化度が高い。赴任当時の事務所で職員みんなが三線を弾き、地元の祭りや神事での歌や踊りが自然と体に染み付いているように感じました。神様が存在するとされる御嶽など独特の信仰空間があり、それを中心とした地域コミュニティが根付いている。同じ島でも、小さいエリアでいろいろな風習や祭事があるんです。興味深いですよ。私は沖縄言葉で語られる人生訓が大好きです。『ウチかたせ(おうちかたせ)』、『ウチやちり(おうちやちり)』(二度田中)

1947年神戸市出身。東京農業大卒業後、建設省(現国土交通省)に入社。兵庫県出向後、兵庫県立淡路景観園芸学校校長などを歴任。数々の自撰の「わたしは神戸っ子」など。

#### ひとこと

職場で悩み、心を病んでいた中で迎えた取材日。終始笑顔で、仕事への情熱や島の魅力を語る姿に引き込まれた。私もコロナ後にゆるゆる目指そう。「なんくるないさ」。島でなら、涙もすぐに乾くだろう。

沖縄への赴任後、兵庫県では兵庫県立淡路景観園芸学校校長などを務めました。

淡路景観園芸学校には、1999年4月の開校と同時に副校長として携わりました。構想段階の94年から加わっていましたが、阪神・淡路大震災で一度中断になった。震災後は花と緑が持つ癒やしの力が新設されましたが、その実態から、見直されたのが「園芸療法」を学ぶ課程。病後や事故で心や体が傷ついた人のリハビリに園芸や園芸作業を活用します。被災県として震災の教訓から学び、全国に先駆けて開校した特色あるコースです」

沖縄は22年5月、本土復帰50年という節目の年を迎えます。

「復帰後、沖縄では『本土並みの社会資本や生活水準の確保』が掲げられ、公共事業や民間開発が進みました。その過程で美しい砂浜が埋め立てられ、開発用地になっていきます。伝統的な行事や建物、自然が次第に失われつつあります。日本は、ともすれば、文化より経済を優先しやすい。本島の内外で、数年に一度しか開かない神事や奇祭もあります。今後は時間を見つけて、小さい島を訪れ、消えつつある文化を研究してみたいですね」

「兵庫県との関わりは、沖縄は昔からゆかりが深く、神戸市(須磨区)出身の島田敏知事は沖縄県民からいまだに慕われています。来年は両県が『友愛協定』を結んで50周年です。文化や芸術、経済などの幅広い交流がこれからも続くように、私も自分のできることを続けていきたいと思っています」